

聖カスバート崇拝と 『リンディスファーン福音書』の製作

白井直美 遠山茂樹

中世初期ノーサンブリアにおける聖カスバート崇拝について考察する上で、忘れてはならない遺産がある。それが、『リンディスファーン福音書』である。現在ロンドンの大英図書館に残されているこの福音書写本は、698年に挙行されたカスバートの聖体奉挙の儀式を記念して、リンディスファーン修道院で製作されたものといわれている。また同書は中世写本芸術の逸品といわれ、約1300年の歳月を経ているにもかかわらず、ほぼ完全な形で現存している。さらに注目すべき事に同福音書には、それがいつ、どこで、誰が、何のために製作したかを記録した奥付けがつけられている。そしてその奥付けには「カスバートに捧げられた」という文言が明記されているのである。

本稿では、聖カスバート崇拝が残した貴重な遺産であるこの『リンディスファーン福音書』をテーマとしてとりあげ、製作の契機となった歴史的背景について考察する。また同福音書の奥付けにおいて、製作者とされているイードフリースに焦点をあて、彼が聖カスバート崇拝とどのように関わったかを彼の経歴から考察し、あわせて同福音書の製作がカスバート崇拝の発展にどのように寄与したかを考えてみたい。

1. 『リンディスファーン福音書』と歴史的背景

『リンディスファーン福音書』(The Lindisfarne Gospels)¹は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書の写本である。この福音書のテキスト部分は、ラテン語で記されているが、10世紀になってラテン語の行間に古英語の逐語訳が加えられ、聖書学上や言語学上の貴重な史料とされている。同福音書は縦34cm、横25cmという大型の写本で、羊や牛を素材とする上質な皮紙が使用され、259葉(518ページ)の冊子体に綴られた製作当時の形状を保持している。し

かし同福音書が世に知られている最大の特徴は、それが見事な装飾頁をもつ装飾写本であるという点にある。ヨーロッパでは古代から中世にかけて、祈祷や典礼に使用するための聖書が、教会や修道院で手書きによって製作された。今日でもバチカンをはじめとする各地の図書館には、こうした聖書写本が数多く所蔵されている。それらの聖書写本の中には、テキスト部分に加えて、聖書の内容を図解するための挿絵が入れられたものも多い。しかし『リンディスファーン福音書』の場合、解説的な挿絵を描くかわりに、抽象的な装飾を用いて福音書の教えが表現されている。同書のような写本は装飾写本 (Illuminated manuscript) と呼ばれ、美術史の上でも研究者の関心を集めている。

『リンディスファーン福音書』には、カーペット頁、装飾頭文字頁、対観表頁、福音書記者の肖像頁の4種類の装飾ページがある (図版1~4参照)。なかでも中扉のように配置され、装飾が全面に描かれているカーペット頁 (図版1) と、デフォルメした文字と装飾を組み合わせ描かれた、装飾頭文字頁 (図版2) は目を引く。そしてこれらの装飾ページの美しさゆえに、同書はアイルランドの『ダロウの書 (the Book of Durrow)』、『ケルズの書 (the Book of Kells)』と並んで、中世装飾写本の傑作とされているのである。他方では、対観表 (図版3) の上部に架けられたアーチのデザインや、福音書の記者マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの肖像画 (図版4) には、地中海美術の影響が色濃く現れているといわれる。

同福音書のような装飾写本は、7世紀から9世紀にかけてアイルランドやブリテン島を中心に製作された。美術史上、これらの装飾写本は「インスラー (Insular)」あるいは「ハイバーノ・サクソン (Hiberno-Saxon)」様式として分類されている²。歴史的にみればインスラーまたはハイバーノ・サクソン様式に属する写本の多くは、6世紀末以降アイルランドからブリテン島や大陸へ渡った修道士たちが、その渡航先で製作した聖書である。その好例といえるのが、コロンバヌス (Columbanus : 540/3-615年) が6世紀末に行った大陸伝道であり、彼の活動によってフランスからイタリアに及ぶ各地に、アイルランド系の修道院が建設されたが³、現在「ハイバーノ・サクソン」様式として分類されている写本の多くは、こうした修道院で製作されたものである。写本製作の際修道士たちは、単に聖書のテキストを書き写しただけでなく、アイルラ

ンドの装飾美術の伝統を踏襲して、様々な装飾ページを描いた。また彼らは装飾に加えて、各地の土着の美術や地中海美術の要素を織りまぜ、独自の美術表現を生み出した。それ故に、「ハイバーノ・サクソン」様式の写本には、アイルランドの装飾美術に他地域の美術的要素が融合し、複数の美術的特徴が混在する事となったのである。

現在、この様式に分類される写本はヨーロッパで百数十点確認されているが⁴、その中でも『リンディスファーン福音書』は、複数の美術的要素の融合が鮮明に確認できる例として、美術的のみならず歴史的にみても興味深いものとされている。すなわち同福音書が製作された8世紀初頭のブリテン島には、アイルランドの修道院文化の他に、ゲルマン系の移住者が伝えたアングロ・サクソン文化、ローマ以来の初期キリスト教文化やビザンツ文化など、多様な文化が土着し混在していた。そして同福音書は、このような環境の中で作られたために、様々な文化や美術的要素を吸収し、古代から中世への過渡期にあったノーサンブリアの文化的多様性を反映しているのである⁵。

ではこの『リンディスファーン福音書』は、いつ頃どのようにして製作されたのだろうか。この福音書の製作に至るまでの歴史的経緯を概観しておこう。

『リンディスファーン福音書』はその名の通り、ブリテン島北東部ノーサンブリアのリンディスファーン修道院で製作されたといわれている。製作地であるリンディスファーン修道院は、635年にノーサンブリア王国のオズワルド (Oswald) 王の要請を受け、スコットランドのアイオナ (Iona) 修道院から来たエイダン (Aidan) が、設立した修道院である⁶。同修道院は設立当初からノーサンブリア王家との関わりが深く、この地方のキリスト教化の拠点となったが⁷、しかしこのリンディスファーンが今日、聖なる島 (Holy Island) と呼ばれ信仰を集めるゆえんとなったのは、7世紀末にこの地を中心として発生した聖カスバート崇拝である。

リンディスファーンの聖カスバート (Cuthbert) は、中世初期のブリテン島を代表する聖人で、ノーサンブリア王家の聖人とも目された人物であった⁸。カスバートは634/5年にノーサンブリアで生まれ、651年頃にメルローズ (Merlose) 修道院で修道生活を開始した後、664年頃からリンディスファーン

修道院の修道士となった。彼はここで修道院長（678年以降は司教）のエータ（Eata）と共に、他の修道士たちの指導にあたり、685年から2年間、リンディスファーンの司教職を務めた⁹。カスバートは687年3月20日に没したが、彼の死後リンディスファーン修道院では、彼を聖人化し¹⁰、彼のための墓所が教会内に設けられた。こうして7世紀末頃からこの地で聖カスバート崇拝が発生したのであるが、その発生の背後には当時ノーサンブリア国内に内在した政治的、宗教的諸問題が横たわっていた¹¹。

7～8世紀前半にかけてノーサンブリア国内では、王や王族が教会と密接な結合関係を築き、権力保持のために相互に依存しあっていた。いい換えるならば、教会は王や王族の支持を得る事によって政治的権力を獲得し、王や王族側も教会のもつ宗教的権力を政治に利用するために、積極的に教会に働きかけを行っていたのである。なかでもウィルフリッド（Wilfrid）のように、王族と密接に関わる事によって、聖職者でありながら政治的権力を獲得した人物が登場すると、これを危険視した王たちは教会との結びつきを一層強固なものにして、権力の保持に努めねばならなかった。その顕著な例といえるのが、ノーサンブリア王による聖人崇拝の支援である。一般に王や王族から信奉を集めた聖人は、ロイヤルセイント（王家の守護聖人）として崇められ、そうしたロイヤルセイントをまつる教会には政治的、宗教的権力が付与された。王や王族の庇護を通じて権力保持を望む教会にとって、ロイヤルセイントの輩出こそが、王や王族との結合関係を築くための最良の手段だったのである¹²。

聖カスバート崇拝の発生も、こうした王との結合関係の構築という要素を含んでいた。しかしカスバートの場合、特筆されるべきは、彼が生前からノーサンブリア王家の信頼を得ていた事である。ノーサンブリア王エッグフリース（Ecgrifith）は、カスバートがリンディスファーン司教に就任する事を熱望し、王自らカスバートの庵を訪れて、これを要請したとベータは伝えている¹³。他にもエッグフリース王は、685年ピクト人との戦いに出る前にカスバートを呼び、その戦いに関して彼に意見を求めたことも知られている¹⁴。こうしたエッグフリースとカスバートの親交を考慮すると、生前から王の信頼を得ていたカスバートは、ロイヤルセイントとなるに格好の人物であった。それ故にリンディスファーンの修道士たちは、カスバートの死後も彼を通じて王からの支援を享

受け継ぐために、聖カスバート崇拝を生み出したのである。そしてリンディスファーン修道院が、聖カスバート崇拝を展開するために行った最初の盛大な儀式といえるのが、698年の聖体奉挙(Translation and Elevation)の儀式¹⁵であり、この儀式によってカスバートの棺が教会の床の上に安置される事で、リンディスファーンは聖カスバートの巡礼地となったのである¹⁶。さらにこの698年の聖体奉挙の挙行を契機に、リンディスファーンでは聖カスバート崇拝をひろめるために、豪華な福音書写本が製作される事になる。そしてこれこそが、上述した『リンディスファーン福音書』にほかならない。同福音書は、上述したような歴史的文脈において、聖カスバート崇拝発生直後のリンディスファーン修道院の状況を知るための、重要な手がかりとなり得るものなのである。

2. 『リンディスファーン福音書』の製作と 製作者イードフリース

では、この『リンディスファーン福音書』はどのようにして製作されたのだろうか。同福音書には奥付けが残されており、そこには同書の製作者に関して以下のような記述がみられる。

リンディスファーン教会の司教イードフリースが、はじめにこの書を、神と聖カスバート、およびこの島に聖遺物を置く全ての聖人に捧げるために記した。そしてリンディスファーン島の人々の司教アエセルワルドが、彼の知っていた方法でこれを束ね、外装をつけた。そして隠者ビルフリースが、その外装を金や銀、宝石などを用いて飾った。最後にアルドレドという、とるにたらない下級の司祭が、テキストの行間に英語による訳を、神と聖カスバートの助けによって、書き加えた……¹⁷

同福音書の製作者たちの名前を記録したこの奥付けは、同書の最終ページの余白に記され、そこに書かれているように、アルドレド (Aldred) という司祭によって残されたものである。このアルドレドは、950年～970年頃¹⁸ラテン語の福音書テキストの行間に、古英語 (アングロ・サクソン語) による逐語

訳を書き加えた人物といわれている。アルドレドの生涯や経歴については不明な点が多いが、この奥付けや逐語訳を書いた時には、彼はチェスター・ル・ストリート (Chester-le-Street) の司祭であったといわれている。そしてこのチェスター・ル・ストリート教会には、883年から995年の間リンディスファーン修道院の一行が、カスバートの棺やその他の聖遺物と共に滞在していた。この点からするとアルドレドは、リンディスファーン修道院の一員であり、司祭としてカスバート崇拜にたずさわっていた事になる。アルドレドは『リンディスファーン福音書』に、古英語の逐語訳と上述の奥付けをつけたのであるが、この奥付けの内容に関しては、その歴史的信憑性を疑問視するむきもある。というのも、それが同福音書の製作から250年余り経過した後に書かれたものであるからだ。しかし近年、この奥付けに関する研究が進み、他の史料との比較により、同福音書がイードフリースによってリンディスファーンで製作されたという、奥付けの記述は歴史的に裏づけられている¹⁹。ではこの奥付けで同福音書の製作者とされているイードフリースとは、一体どのような人物であったのだろうか。

イードフリース (Eadfrith) は、「神とカスバートのために」同書を記したと伝えられる人物である。彼は、698年3月にカスバートの聖体奉挙を行った司教エアドベルトが、同年の5月に病死したのをうけて、リンディスファーン司教に就任した (在任:698-721年)²⁰。12世紀初頭の年代記作者ダーラムのシメオン (Simeon of Durham) の記述では、イードフリースは24年間という長い期間、カスバートへの愛によって司教職を務めた人物と称され、カスバートがファーン島での修行中に暮らした庵を補修した人物としても紹介されている²¹。またイードフリースは、リンディスファーンの修道士とベータに、聖カスバート伝の執筆を依頼した人物としても知られている。ベータはこの功績を、彼の記した聖カスバート伝の冒頭において以下のように讃えている。

聖にして最も祝福されし父なる司教イードフリース、およびリンディスファーンの島の内においてキリストに仕えし全ての同胞たちへ、あなたがたの忠実なる下僕ベータより、ご挨拶申し上げます。

親愛なる友であるあなたが私に執筆を命じられたこの伝記は、私たちの父

なるカスバートが神によって祝福されたという記憶を綴ったものですが、私は慣例に従って、この前書きを記します。それにより、この書物を読む全ての者が、あなたの意志と望みを知り、また私のあなたへの賛同と忠従を知るようになるでしょう²²。

やや誇張はあるものの、このペーダの記述からは、イードフリースが司教在任中、カスバート崇拜の促進に貢献した人物であった事がうかがえる。さらにイードフリースに関しては、彼の司教就任前の経歴をうかがわせる、興味深い史料が残されている。それは9世紀初めにアエセルウルフ(Aethelwulf)が書いた*De Abbatibus*の1節で、そこにはアエセルウルフがある夜カスバートの墓所を訪ねる夢をみた話が書かれている。そしてその夢の中にEadfridusという人物が登場するのであるが、アエセルウルフはこの人物に関し、以下のように記している。

反対のほうへ顔を向けると、そこにはずっと以前にアイルランドから渡来したとして知られている者の顔がみえました。彼が生前に呼ばれていた名前前でいえばイードフリース(Eadfridus)であり、彼は私が若い頃の師であった方でした。そして彼は司祭であり、また内部の人々から愛をもって語られる長であり、責任と忠実をもってその身体と精神により、祝福されしカスバートの墓所を尊んだとされる人物でした²³。

アエセルウルフの史料に表れるこの人物は、同福音書の製作者イードフリースと同一人物であるとみなされている。そしてこの事からイードフリースの経歴に関し、2つの可能性が浮上する。すなわち、彼がアイルランド生まれで、修道士としてブリテン島にやってきたのか、あるいはブリテン島からアイルランドへ渡り、その後戻ってきたのか、という可能性である²⁴。前者なのか、それとも後者なのかを断定するのは難しいが、こうした彼の経歴からは、7世紀後半から8世紀にかけてのブリテン島とアイルランドの教会間の交流がうかがえる。

ブリテン島とアイルランドの教会間の交流は、7世紀初頭ノーサンブリアの

キリスト教化とともに緊密となっていった。それはノーサンブリアのキリスト教化の拠点となったリンディスファーンが、アイルランド教会の流れをくむスコットランドのアイオナ修道院の系列にあり、初代司教エイダンの後も司教たちはアイオナから招かれていたためである²⁵。しかし664年に開催されたウィットビー公会議において、それ以後ブリテン島の教会がローマ教会の規律に従う事が決定されると、リンディスファーンを中心に布教を行っていたアイルランド教会の修道士たちは、ノーサンブリアから撤退した²⁶。従来、この撤退によって、アイルランドとブリテン島の教会間の交流は途絶えたといわれてきたが、近年では、664年のアイルランド教会の撤退以降も両教会間の交流は続いていたと考えられている²⁷。それを裏付けるかのように、ベータの『教会史』には664年以降も、両者の交流が続いていた事を示す記述が数多く残されている。その例として、ブリテン島出身の聖エグベルト (Egbert) が664年頃にアイルランドに渡り、終生その地で修道生活をおくった事や、彼の友人でアイルランドにも同行したアエセルワイン (Aethelwine) が、ブリテン島に戻って、680年にリンドンシー司教に迎えられた事などが挙げられる²⁸。この他にも、ノーサンブリア王アルドフリース (Aldfrith 在位:685/6-705) が、異母兄弟のエッグフリース王によって追放されていた期間中に、アイルランドで学問を積んでいたという事もベータの記述からうかがい知る事ができる²⁹。実際にはアルドフリースが追放期間中に学んだ場所は、ベータのいうアイルランドではなく、アイオナ修道院であったと考えられている。しかし、たとえそれがアイオナであったとしても、アルドフリースがアイルランドの伝統を学び、これに親しんだ王であった事から、アルドフリースの治世にはアイルランドとの交流が盛んであったともいわれている³⁰。

これに対し、アイルランド (アイオナを含む) からブリテン島へ来た者たちの存在も確認されている。そのなかでも最も有名な人物は、『聖コロンバ伝』を記したアイオナの修道院長アダムナーン (Adamnan: 703/4年没) であろう。彼は生涯に2度ノーサンブリアを訪れたといわれるが、そのうちベータが記録している2回目の訪問 (688年頃か) では、アイオナ時代から親交のあったアルドフリース王に謁見している³¹。アダムナーンはこのノーサンブリア訪問の際、ローマ教会の復活祭算定法を受け入れ、それをアイオナにもちかえった。

しかしアイオナでは新しい復活祭の規律はすぐには受け入れられず、彼はその後アイルランドへ渡航し、アイルランドにローマ教会（カトリック）の復活祭算定法を伝えた。アダムナーンのこの功績によって、アイルランドにおいても、ローマ教会の復活祭が遵守される事となったとペーグは記している³²。このような記述から、7世紀後半から8世紀前半には、アイオナおよびアイルランドとブリテン島の間で、修道士や教会を介し頻繁な交流が行われていた様子がうかがえる。そして同福音書の製作者であるイードフリースも、彼がアイルランドとブリテン島を往来する事によって、まさにそうした両教会の交流を担った人物であった可能性が高い。

それではイードフリースは、どのようにして同福音書を製作したのであろうか。彼は同書の膨大なテキストと装飾ページを、全て一人で手がけたと考えられており、写字僧（scribe）としても芸術家としても、卓越した技術の持ち主であった。特に彼が描いた緻密な装飾ページには、アイルランドで680年頃に製作された『ダロウの書』との類似性が指摘され、彼の装飾技術は彼がアイルランドで習得したものとされている。上にみたように、7世紀後半以降アイルランドとブリテン島の教会が交流を続けるなかで、ブリテン島にはイードフリースのように、アイルランドで装飾写本の技術を習得した写字僧たちが、数多くいたと推測されている。その好例というべきものが、前述のアエセルウルフの記録の中にある。そこにはイードフリースの時代より1世紀後の9世紀初頭、リンディスファーンの写字室（scriptorium）に、ウルタン（Ultan）というアイルランド人の写字僧がいた事が記されている。

彼（ウルタン）はアイルランド人の至福なる司祭であった。そして彼は書物を見事に装飾する事ができ、この熟練した技によって、一字一字の文字を美しく形づくる事ができた。それゆえに今日の写字僧のなかでは、誰一人として彼に及ぶ者はいない。³³

上の記述からは、ウルタンが卓越した装飾技術によって尊敬を集めていた様子がうかがえる。それと同時に、これが記された9世紀初頭（Hughesはこの時期を803年～821年頃としている³⁴）には、リンディスファーンの写字室にお

いて『リンディスファーン福音書』と同じように、装飾を描いた写本が製作されていた事がわかるのである。しかし9世紀頃に製作された装飾写本のうち、ウルタンの作品、またはリンディスファーンで製作されたと伝えられる作品は、現存していない。だがウルタンの存在は、リンディスファーンでは9世紀にも装飾写本が製作されており、その技術は7世紀後半の場合と同様に、アイルランドから修道士によってもちこまれていた事を示している。イードフリースやウルタンのように、アイルランドで装飾の技術を学び、ブリテン島に渡った人々は、彼らがアイルランドで目にした装飾写本に倣って、類似の装飾写本を製作したにちがいない³⁵。こうしたことから同福音書に装飾頁が含まれている事自体が、7世紀後半以降のアイルランドとの交流を示しているのである。

他方イードフリースは同福音書を製作するにあたり、ウェアマウス(Wearmouth)またはジャロウ(Jarrow)修道院から、イタリアで製作された福音書を手本として借用したといわれ、それ故に同書には地中海方面からの文化的影響もまた顕著にあらわれている。このウェアマウスとジャロウの修道院は、ベネディクト・ビスコプ(Benedict Biscop)なる人物によって、前者は674年に、後者は681年にタイン(Tyne)川とウェア(Wear)川の河口近くに建立された。両修道院には、ビスコプやベダの師であるケオルフリース(Ceolfriht)らによって、イタリアから聖書や様々な学術書がもちこまれ、これらを手本として両修道院では多くの写本が製作された³⁶。そしてノーサンブリアには、ウェアマウス、ジャロウ修道院を介して地中海の学問や美術が流入し、7世紀後半～8世紀前半には両修道院を中心として、ノーサンブリア・ルネサンスと呼ばれるような文化的・学問的な隆盛がみられた³⁷。『教会史』を記したベダはジャロウ修道院でこの時期を過ごし、彼自身もノーサンブリア・ルネサンスの担い手となって、多くの歴史書や聖書の注釈書、文法書その他、科学的な学術書などの著作も残した。こうしたノーサンブリアにおける文化的・学問的な隆盛は、リンディスファーンにも影響を与えたのである。

イードフリースはウェアマウス、ジャロウの両修道院から『アミアティヌス写本(The Codex Amiatinus)』と呼ばれる聖書を借り受け、それを手本として同福音書を製作したといわれている。特に同書の福音書記者マタイ像に関しては、『アミアティヌス写本』のエズラの肖像と服装や構図が酷似しており、イー

ドフリースはこれを模してマタイ像を描いたと考えられている³⁸。この『アミアティヌス写本』は、イタリアで製作された『グランディオール写本 (Codex Grandior)』を、ウェアマウス、ジャロウ修道院で写したものであった。イードフリースが製作した『リンディスファーン福音書』は、『アミアティヌス写本』に倣って描かれたため、間接的ではあるが、地中海美術の特徴を吸収することになったのである。またイードフリースは、福音書のテキストについても、『アミアティヌス写本』を手本とした可能性が高い。『アミアティヌス写本』のように、イタリアからノーサンブリアに輸入され、この地で写字された聖書は、聖書学上、イタロ・ノーサンブリアン (Italo-Northumbrian) の一群に分類され、同福音書のテキストもこの中に位置づけられている。同福音書のテキストは、聖ヒエロニムス (St Jerome) が、4世紀後半～5世紀初頭に翻訳したウルガタ訳に準じており、ラテン語聖書の初期の好例であるといわれている。さらに同書のテキストに関しては、10世紀、上述のアルドレドによって、ラテン語の行間に古英語による逐語訳が書き加えられた事で、聖書学上および言語学上、すこぶる貴重な史料として、研究者の関心を集めている事を特記しておきたい³⁹。

上述のように同福音書の製作に際し、イードフリースはアイルランドと地中海世界の双方から、それぞれ異なる文化的、美術的影響を吸収していた。その結果、同福音書は、多様な文化的影響を内包することになったのである。さらにここで注目すべきは、イードフリースが様々な文化に接触しつつも、その単なる模倣にとどまらず、独自のスタイルを作りあげている点である。具体例をあげれば、彼は水鳥をかたどった装飾文様を初めて描いた人物であるし、また、島嶼部で使用されていたハーフアンシャル体 (half-uncial) の文字を改良し、改良型のハーフアンシャル体を使っていた⁴⁰。このように、イードフリースは7世紀末から8世紀初頭のノーサンブリアの様々な文化的、美術的影響を受けながら、同福音書を製作していた。Brown, M.の言葉を借用するならば、それはまさに保守と刷新の間で揺れながらもノーサンブリアをリードした、リンディスファーン修道院の立場そのものだったのである⁴¹。

3. 聖カスバート崇拜における『リンディスファーン福音書』の位置づけ

さて、ここでもうひとつ、『リンディスファーン福音書』に関して取り上げねばならない問題が残っている。同福音書の製作目的をめぐる問題がそれである。上にあげたアルドレドによる奥付けには、「神とカスバートのために」と製作の理由が述べられているが、その言葉が示す具体的な内容については推測の域をでていない。この「カスバートのために」という文言は、どのような事を意味するのだろうか。同福音書の製作をカスバート崇拜の中で位置づけた場合、どのような歴史的背景がみえてくるであろうか。

既に述べたように、同福音書の製作にはカスバート崇拜の発生が密接に関わっていた。その中でも698年3月20日に挙行されたカスバートの聖体奉挙が、カスバート崇拜の発生を決定づけたものである事から、同福音書の製作は698年のこの儀式と連動して行われた可能性が高い。さらに製作者イードフリースの司教就任が、前の司教エアドベルトが病死した698年の5月以降である事や、イードフリースが司教就任直後や、司教在任中といった多忙な時期に、同福音書の製作に携わったとは考えにくい事などを加味し、同福音書の製作はイードフリースが司教に就任する前、すなわち698年以前であると考えられてきた⁴²。しかしこの従来の説に対して、近年、同書の製作年代を再検討する動きがあり、2003年にはBrown, M.が新たな製作年代を提示し、今後一層の議論が期待されている。

Brownによれば、同福音書の製作時期は、従来いわれていた698年以前ではなく、聖体奉挙後の時期、具体的には710年から20年代に設定できるという。それはイードフリースが、司教在任中の多忙な時期を避けて同福音書を製作したと考えた場合、製作時期は彼の司教就任以前ではなく、彼の晩年、すなわち彼が司教を辞する前の時期であった可能性が浮上するからである。そしてBrownはその史料的根拠として、アルドレドによる奥付けに示されていた、「アエセルワルドがこれを束ねた」という部分をあげ、同福音書を冊子に束ねる製本作業が、次の司教アエセルワルド (Aethelwald/Ethelwald:721/4-40年) に

引き継がれた事に疑問を投げかけている。もし同福音書の製作が、従来いわれていたように698年以前であったとすると、同書は20年以上もの長きにわたって、束ねられず放置されていた事になる。しかしもし同書の製作がイードフリースの晩年であったならば、彼が製本作業を行う前に死亡したために、アエセルワルドが代わりにそれを行ったと想定できるというのである⁴³。

Brownの説は、同福音書の製作年に対し新たな可能性を示すものである。しかし同氏は、イードフリースが製作の要請を受けたのは、司教就任の前であると述べているところから⁴⁴、製作要請から着手までの空白の時間について、なんらかの説明が必要となるであろう。さらに製本作業がアエセルワルドに引き継がれた件についても、イードフリースがそれを行う前に没したからとするには決め手を欠く。加えてBrownの提示する710年という年には、歴史的な裏づけが十分に示されておらず、むしろイードフリースの没年から逆算された年代のように感じられる⁴⁵。こうした点においてBrownの説は、さらに検討の余地があるが、同福音書の製作年代が従来の説より、10年～20年遅かった可能性を提示した事は特筆すべきである。というのも、同福音書を聖カスバート崇拝の発生という歴史的文脈でとらえる場合、698年の聖体奉挙以前と以後では状況が大きく異なるからだ。特にBrownの提案する710年～20年という時期は、リンディスファーン修道院や聖カスバート崇拝が、変化しつつあった時期にあたるのである。

ここで筆者はBrownの説を踏まえた上で、同福音書の製作年代に関し、さらなる仮説を提案したい。それは同福音書を聖カスバート崇拝の歴史的文脈のなかで考える場合、同書の製作がBrown説の710年より早く、705年頃から始められた可能性があるというものである。筆者が製作の契機と推定する705年は、イードフリースの指示により、リンディスファーンの修道士たちによって執筆された、『聖カスバート伝』が完成したとされている年にあたり、聖体奉挙以後の聖カスバート崇拝の発展をみる上でも、ひとつの転機をむかえた年なのである。

聖体奉挙の儀式後、聖カスバート崇拝はリンディスファーンを中心にひろまっていった。そしてカスバートの墓所や聖遺物を通じて、聖人による癒しの奇跡が伝えられると、カスバート崇拝はノーサンブリアに浸透した⁴⁶。しかし

705年頃になると、リンディスファーンはある人物の脅威に遭遇する事になる。その人物とは、カスパートとリンディスファーン修道院の長年のライバルであり、ノーサンブリア王さえも脅かしたウィルフリッドにほかならない。王と対立し国外追放を受けていたウィルフリッドは、705年ノーサンブリア王アルドフリースが死亡したのを受けて、ノーサンブリアへ帰還した⁴⁷。ウィルフリッドのこの帰還こそ、リンディスファーンが最も憂慮していた事であったし、司教イードフリースはウィルフリッドが再び権力を得て、リンディスファーンを脅す事に備え、対抗していかねばならなかった⁴⁸。結果的に、イードフリースの要請に応じて、修道士による『聖カスパート伝 (VCA)』(705年頃)が執筆されたが、これは対ウィルフリッド策とでもいうべきものであった⁴⁹。つまりイードフリースは、聖人伝などの媒体を通じて、聖カスパート崇拜を強固なものにし、それによってウィルフリッドに対抗しようとしたのである。端的に言えば、彼はカスパート崇拜によって、修道院を守ろうとしたのである。さらにイードフリースは、709年にウィルフリッドが没した後も、ベータに聖人伝の製作を依頼している。そこには、ベータという当代きっての知識人に『聖カスパート伝』を執筆させる事によって、カスパートの権威を一層高めていこうという狙いが込められていた。換言すれば、カスパート崇拜が他を、ことにウィルフリッドの信奉者たちを圧倒する必要があるという事なのである⁵⁰。

こうして眺めてみると、イードフリースの司教時代(698～721年)は、カスパートの聖体奉挙を受けて、後にカスパート崇拜の核となる聖人伝が立て続けに執筆されるなど、カスパート崇拜の宣伝活動が、積極的に行われた時期にあたる事が理解される。そしてこのような宣伝活動を主導したのが、司教イードフリースであり、その活動の背後にはウィルフリッドの脅威があったのである。このイードフリースが、聖人伝などと同様に聖カスパート崇拜の宣伝のために、自身の手で製作したものが『リンディスファーン福音書』なのであった。ウィルフリッドの帰還から、イードフリースが没するまでの705年～721年の間は、リンディスファーンがカスパート崇拜の媒体となるものを製作し、それと同時に物質的な強化を成し遂げた時期に相当する。同福音書の製作意図を加味すれば、聖人伝執筆の要因とされるウィルフリッドの帰還が、同書製作の直接的契機になった可能性は高いといえるのではないだろうか。つまり同福音書

が、ウィルフリッドの帰還を契機に、彼に対抗するために製作されたと考えると、製作年代はBrownの説よりやや幅広くなるものの、ウィルフリッドの帰還からイードフリースが没するまでの705年～721年の間に位置づけることができるのである。こうした歴史的文脈のなかで捉えると、「カスバートのために」という奥付けの文言は、カスバート崇拝の促進と強化のために、と置き換えることができよう。つまりイードフリースらは、リンディスファーン修道院において、カスバート崇拝というソフトウェアを円滑に展開するための、いわばハードウェアとして『リンディスファーン福音書』や聖人伝を製作し、利用したのである。

以上にみたように、『リンディスファーン福音書』は1300年前の作品であるにもかかわらず、製作者や製作地、さらには「カスバートのために」作られたという製作目的までもが、記録として残されている。この事は、聖カスバート崇拝の発展過程をさぐっていく上で、欠くことの出来ない史料的价值を同福音書に付与している。そして、同書の製作者であるイードフリースの生涯や作品を通じ、カスバート崇拝発生直後のリンディスファーン修道院の状況が、臆気ながら浮かび上がってくる。しかしながら、同書の製作年代をめぐる議論が現在も続いているところに端的にみられるように、同福音書に関しては歴史的にみて、立証困難な問題が多々残されている。例えばイードフリースから仕事を引継ぎ、同書の装丁を行った司教アエセルワルドや、金工による豪華な外装を作った隠者ビルフリース (Billfrith) に関しては、その素性がほとんど知られておらず、彼らが同福音書の製作にどうかかわったかについても不明な点が多い。考察すべき点は山積しているが、同福音書が8世紀初頭の聖カスバート崇拝の様相を今に伝える、貴重な遺産である事に変わりはない。カスバート崇拝の発生とその発展過程を追究する上で不可欠な『リンディスファーン福音書』に関し、さらなる検討をかさねていく事を今後の課題として、筆を擱きたい。

参考文献

- 1 『リンディスファーン福音書』に関しては多くの研究書が出版されている。本稿では同書の詳細なデータに関しては、大英図書館の学芸員であるBackhouseやBrownの研究に従っている。Backhouse, J., *The Lindisfarne Gospels*, London, 1981; Brown, M.P., *The Lindisfarne Gospels: Society, Spirituality and the Scribe*, Cambridge, 2003.
- 2 この名称は、写本の多くがアイルランドやブリテン島を中心に分布している事に由来する。「インスラー（島嶼部）」も「ハイパーノ・サクソン（ヒベルニアとサクソン人の地域）」も同義であるが、研究者の好みで分けて使われる事が多い。
- 3 コルンバヌスの大陸伝道はExile(贖罪巡礼)ともいわれ、修道精神を培うための過酷な修行という面を備えていた。この点については、盛節子『アイルランドの宗教と文化ーキリスト教受容の歴史ー』,日本基督教団出版局,1991,pp129-155. を参照。
- 4 「インスラー」「ハイパーノ・サクソン」の写本に関しては以下を参照。Alexander, J.J.G., *Insular Manuscripts 6th to the 9th Century, A Survey of Manuscripts Illuminated in the British Isles*, t.1, London, 1978.
- 5 Brown, M., *Painted Labyrinth: The World of the Lindisfarne Gospels*, London, 2003, p.4.
- 6 *Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum, Bede's Ecclesiastical History of the English People, Baedae Opera Historica*, King, J.E. (trans.), 2vols, London, 1930, (以下 *HE*) III - 3,5.
- 7 Colgrave, B., "St.Cuthbert and his Times", in Battiscombe, C.F.(ed.), *The Relics of Saint Cuthbert*, Oxford, 1956, pp.116-17.
- 8 カスバートの生涯と信仰に関しては、以下を参照。Stranks, C.J., *The Life and Death of St Cuthbert*, London, 1964, 1987, 9th ed.; Adam, D., *Fire of the North: The Life of St Cuthbert*, London, 2003.
- 9 *HE* IV-27 ~ 29. この他のカスバートの生涯に関しては、後に挙げる『聖カスバート伝』により詳細な記述がある。特にベアダの散文形式の聖人伝(VCP)は、歴史的事実に基づいているとの評価を得ている。
- 10 ブリテン島ではこの時期多くの聖人が誕生したが、彼らの多くは正式に列聖された聖人ではなかった。Nilsonは、彼らの列聖をTraditionalと分類しているが、カスバートもこれに該当している。こうした聖人の崇拜は、狭い地域で行われる場合が多いが、カスバートやオズワルドのように、広く名声を知られる聖人も存在した。Nilson, B., *Cathedral Shrines of Medieval England*, Woodbridge, 1998, pp.210-211; Cubit, C., "Universal and Local Saints in Anglo-Saxon England", in Thacker, A.& Sharpe, R.(eds.), *Local Saints and Local Churches in the*

early Medieval West, Oxford, 2002, pp.423-453.

- 11 カスパート崇拜の発生にかかわるノーサンブリアの政治的、宗教的背景に関しては、すでに前号において取り上げたので、ここでは詳述を避けた。この点については、白井直美,遠山茂樹「聖カスパート崇拜の発生に関する一考察 —二人の聖人とノーサンブリア王権—」,『東北公益文科大学総合研究論集』,第6号,2003,pp.121-139. を参照していただければ幸いである。
- 12 Rollason, D., *Saints and Relics in Anglo-Saxon England*, Oxford, 1989, pp.114-129.
- 13 *HE IV - 28*.
- 14 *HE IV - 26*
- 15 聖体奉挙(Translation and Elevation)の儀式は、土中などに埋葬された棺を掘り出し、遺体を新しい棺に移す事(Translation)と、その新しい棺を教会の床の上に安置する事(Elevation)の両方から成る。TranslationもElevationも、聖人崇拜の展開において伝統的に行われてきた儀式といわれている。Thacker, A., "The Making of a Local Saint", in Thacker, A.& Sharpe, R.(eds.), *Local Saints and Local Churches in the early Medieval West*, Oxford, 2002, pp.45-73.
- 16 *HE IV - 30* ; *Vita Sancti Cuthberti Auctore Anonymo, the Anonymous Life of St Cuthbert, Two Lives of Saint Cuthbert*, Colgrave, B. (ed. & trans.), Cambridge, 1940, (以下VCA), IV - 14; *Vita Sancti Cuthberti Auctore Beda, Bede's prose Life of St Cuthbert, Two Lives of Saint Cuthbert*, Colgrave, B. (ed. & trans.), Cambridge, 1940, (以下VCP), cap.42.
- 17 この記述は同福音書のfol.259rに書かれているもので、一般に奥付けと呼ばれている。その部分の写真や、英訳されたものは頻繁に目にするが、古英語のテキストが印字されているものは少ない。下記の文献は古英語の奥付けのテキストに関し、詳細な解説が付されており参考になる。Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, pp.102-103.
- 18 アルドレドの奥付けが書かれた時期は諸説あるが、Brown,M.はこの逐語訳が書かれた時期を950年頃であるとしている。Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, p.90.
- 19 Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, pp.92-93.
- 20 *HE III-31*.
- 21 *Libellus de Exordio atque Procursu istius, hoc est Dunhelmensis Ecclesie, Tract on the Origins and Progress of this the Church of Durham*, Rollason, D. (ed. & trans.), Oxford, 2000, I - 11.
- 22 *VCP Prologus*.
- 23 Aethelwulf, *De Abbatibus*, Campbell, A.(ed.), Oxford, 1967, (以下*De Abbatibus*), cap.22.

- 24 Hughes, K., "Evidence for Contacts between the Churches of the Irish and English from the Synod of Whitby to the Viking Age", in Clemeos, P. & Hughes, K.(eds.), *England before the Conquest*, Cambridge, 1971, p.56.
- 25 *HE* III - 17,25.
- 26 *HE* III - 25,26.
- 27 664年以降のアイルランド、ブリテン島の教会間の交流については、Hughesの前掲論文に詳述されている。しかし両教会の交流が継続していたとしても、664年以降アイルランド教会はブリテン島内では歓迎されなかったと、Stancliffeは述べている。この点に関するStancliffeの主張は、以下を参照。Stancliffe, C., "Cuthbert and the Polarity between Pastor and Solitary", in Bonner, G., Rollason, D. and Stancliffe, C.(eds.), *St Cuthbert, his Cult and his Community to AD 1200*, Woodbridge, 1989, (以下 *Cuthbert*), pp.21-43.
- 28 *HE* III - 27.
- 29 *VCP* 24.
- 30 Hughes, K.は、アルドフリースがブリテン島での名前の他に、アイルランドでもFlann Finaという名前をもっていたと指摘している。Hughes, K., *op.cit.*, p.50.
- 31 *HE* V -15,21.
- 32 *Ibid.*
- 33 *De Abbatibus*. cap.8.
- 34 Hughes, K., *op. cit.*, p.56.
- 35 *Ibid.* Hughesは、8世紀にアイルランドの写字僧によってブリテン島で製作された写本として、Trinity College B.10.5 やBritish Library Cotton Vitellius C.viiiなどを挙げている。
- 36 ベネディクト・ビスコプやケオルフリースの生涯に関しては、ペーダが『修道院長伝』を残している。Farmer, D.H.(trans.), "Lives of the Abbots of Wearmouth and Jarrow", in Farmer, D.H. & Webb, J.F.(trans.), *The Age of Bede*, London, 1965, 1988, rep., pp.185-208.
- 37 Neuman de Vegvar, C.L., *The Northumbria Renaissance, A Study in the Transmission of Style*, London, 1987.
- 38 Backhouse, *op.cit.*, pp.44-47.
- 39 Backhouse, *op.cit.*, pp.17-21; Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, pp.151-161.
- 40 Brown, M., *Painted Labyrinth*, p.19; Backhouse, J., *op. cit.*, p.22.
- 41 Brown, M., "The Lindisfarne Scriptorium from the Late Seventh to the Early Ninth", in *Cuthbert*, pp.161-63.
- 42 Millar, E., *The Lindisfarne Gospels*, London, 1923, p.4; Backhouse, J., *op. cit.*, p.14.
- 43 Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, p.109.

44 *Ibid.*

45 同氏は著書の中で、同福音書の製作には準備も含めて10年を要しただろうと算定している。*Ibid.* pp.200-202.

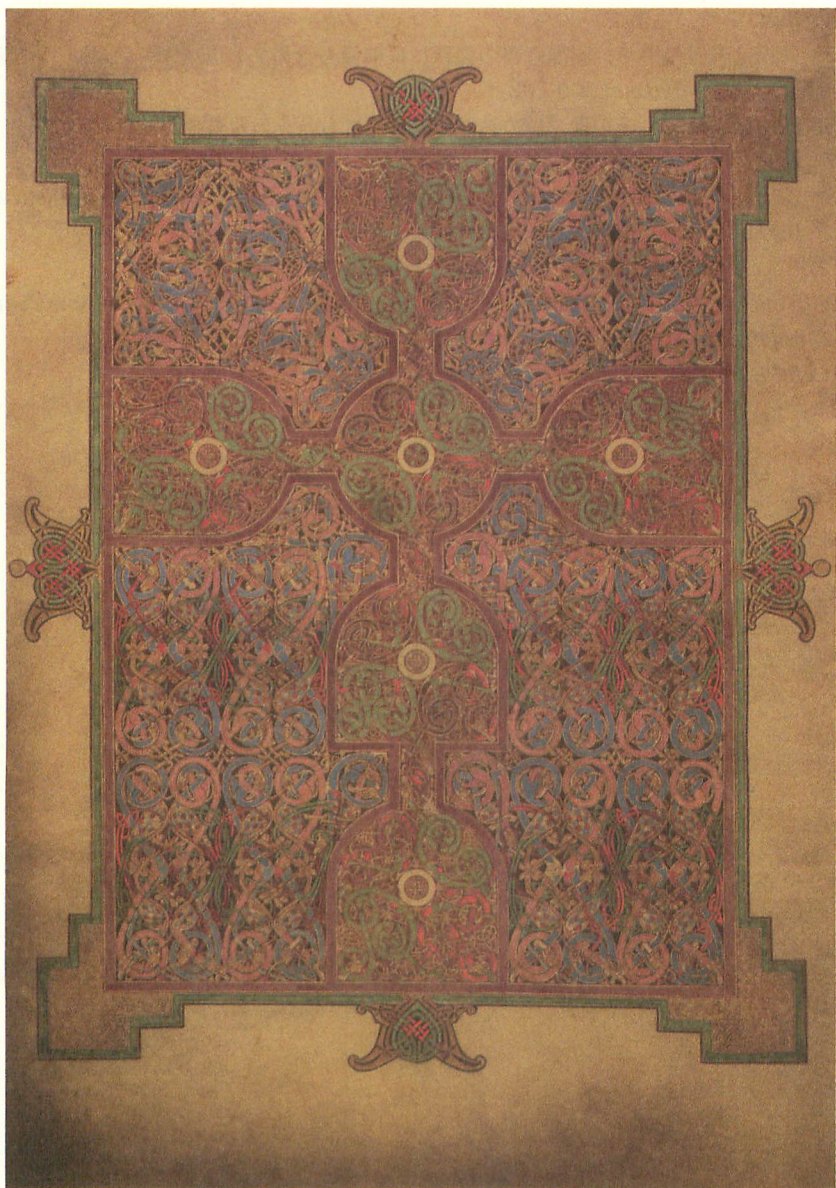
46 *HE* IV - 31,32. その他『聖カスバート伝』にも多くの奇跡譚が記されている。

47 *HE* V - 19.

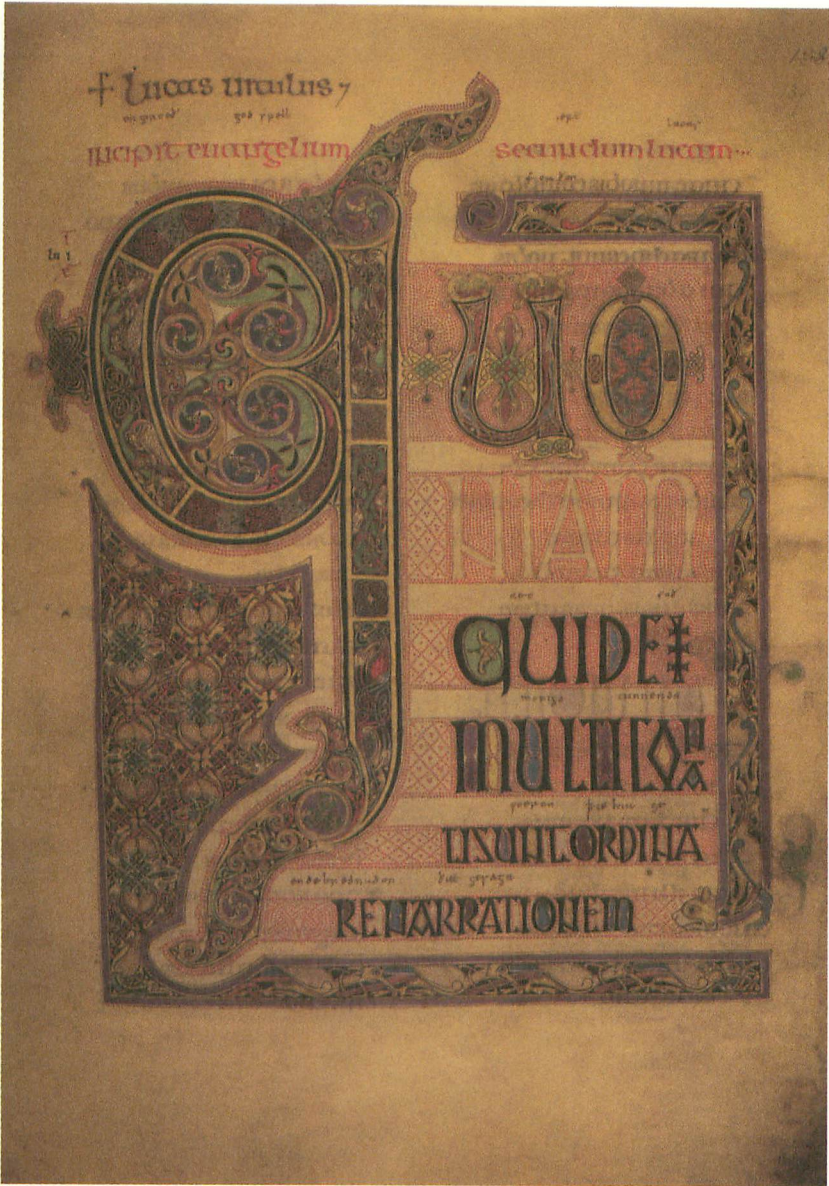
48 Kirby, D.P., "The Genesis of a Cult: Cuthbert of Farne and Ecclesiastical Politic in Northumbria in the Late Seventh and Early Eighth Century", *The Journal of Ecclesiastical History*, t.46/3, 1995, pp.395-397.

49 Thacker, A., "Lindisfarne and the Origins of the Cult of St Cuthbert", in *Cuthbert*, pp.109-119.

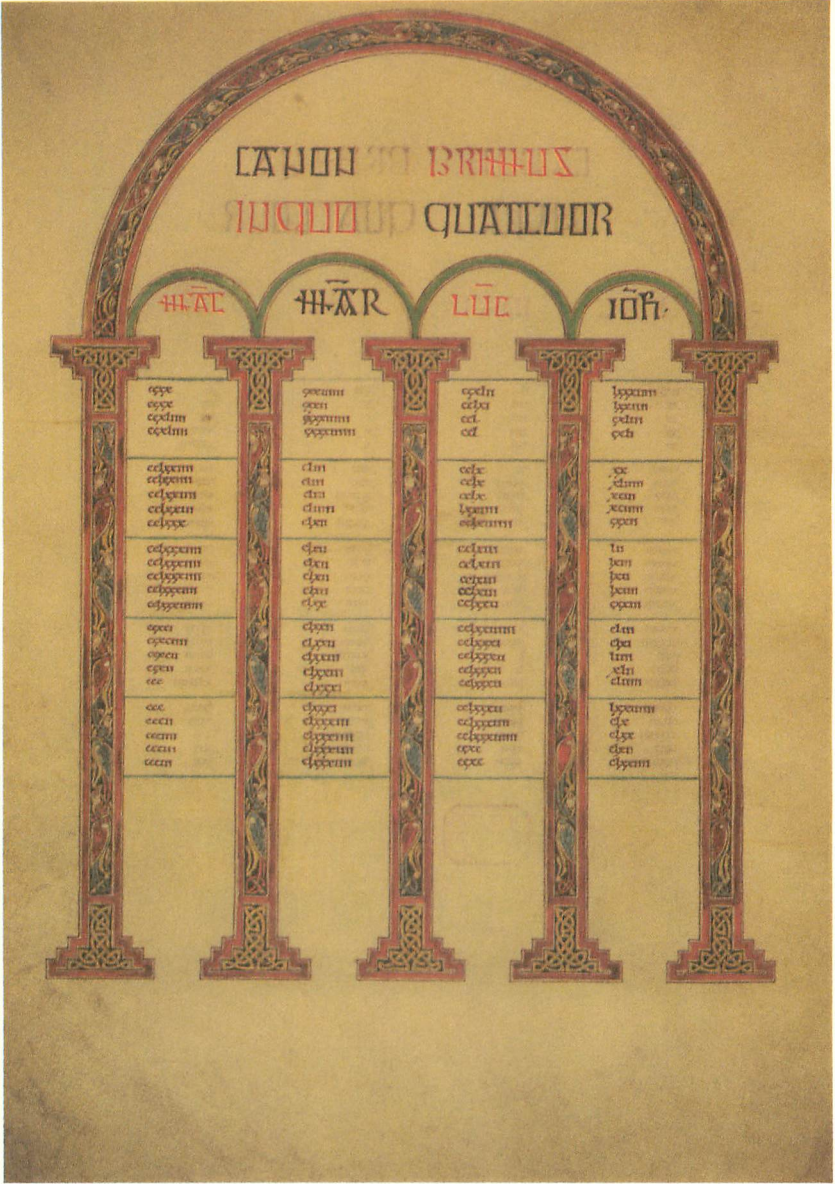
50 *Ibid.* pp.120-21.



図版1 Lindisfarne Gospels (BL, Cotton MS Nero D.iv), f, 26v,
『マタイによる福音書』のカーペット頁。



図版2 Lindisfarne Gospels (BL, Cotton MS Nero D.iv), f, r39r, 『ルカによる福音書』の装飾頭文字頁。



图版3 Lindisfarne Gospels (BL, Cotton MS Nero D.iv), f, rov, 对觀表頁。



図版4 Lindisfarne Gospels (BL, Cotton MS Nero D.iv), f, 25v,
福音書記者マタイの肖像頁。

(図版はいずれも、Brown, M., *The Lindisfarne Gospels, Society, Spirituality and the Scribe*, London, 2003, より掲載。)

＜英文要旨＞ 聖カスバート崇拜と『リンデイスファーン福音書』の製作

白井直美 遠山茂樹

The Lindisfarne Gospels is one of the masterpiece of the manuscripts made in medieval England. The Book is thought to have been made at the monastery of Lindisfarne in the kingdom of Northumbria. Eadfrith, the bishop of Lindisfarne (d.721), wrote and illuminated this Gospels with splendid skills which he might had studied in Ireland. And he made this Gospels under the influence of cultures from Irish and Mediterranean area. It is almost certain that the Gospels have been made for God and Cuthbert in the early 8th century.

The reason why this Gospels have been made connects closely with the birth and expansion of the cult of St Cuthbert. And Eadfrith undertook this work to promote the Cuthbert's cult. After the birth of his cult, the Lindisfarne monastery needed a lot of fame in order to establish the status as the leader of Northumbrian church. For this reason, Eadfrith bid the Lindisfarne monks together, Bede put *the Life of St Cuthbert*, and Eadfrith made this Gospels by himself.

The making of the Lindisfarne Gospels must be considered under this historical context, and it is evident that the making of this Gospels constituted a very distinct landmark in the history of the Lindisfarne community and St Cuthbert's cult.